

命を切る



～四賢婦人・矢嶋楫子の生涯～

文＝福永無想

第八回 「夫、七郎の葛藤」

勝子が林家に来てから一年がたとうとしていた。七郎が飲む濁り酒を作るための麹を買いに出て戻った勝子が、裏木戸から家中に入ると、親しい顔がそこにあつた。

「勝手口で待ちます、て言いましたばつてん」

矢嶋家のかつての奉公人で、杉堂に住むヨシはそう言い、広々とした土間の吹き抜けの天井を見上げ、その高さに口をあんぐりとさせた。

「濁り酒ば作ろうと思うて。ヨシさんな上手だけん、手伝つてくれんですか」

勝子はヨシと二人でみそ蔵で濁り酒を仕込もうと、炊き上がつたばかりの米を作業台上に広げ突然、嘔吐した。

「どうがんしたですか」

心配そうに駆け寄るとヨシは、勝子の背中をさすつた。

「このところ胃の調子が悪くて。ご飯やタケノコの匂いを嗅ぐとむかついて…」

ヨシはピンときた。

「そら、おめでたじやなかとですか」

家に入つてからというもの「子はまだか」とせつつかれてきたが、ようやくして子宝を授かったのだ。普段は偏屈な表情の七郎も、この懷妊を知ると顔をほころばせた。そしてその年の暮れ、勝子は長男の治定を産んだ。

この頃、他藩に漏れず、熊本藩内もぎわついていた。10数年ほど前のこと。藩では尊皇攘夷を志す勤皇党、保守派の時習館党、横井小楠を中心とした藩政改革を唱える実学党が対立した。中でも、時習館党の擁護者で筆頭家老の松井草之と、実学党を支持する次席家老の長岡監物らの権力闘争は激しさを増した。

その後、松井が長岡を失脚に追い込むが、3つ目の勤皇党が勢力をのばし、これと実学党が手を組んだ。ところが、小楠が開国論を唱えるようになると実学党は、長岡の坪井派（藩士派）と小楠の沼山津派（郷士・豪農派）に分裂した。

「先生の言われるごつ、日本ば変えやんつ」

「徳川が倒れ、新しい政ごとが始まつぞ」

沼山津の小楠の私塾「四時軒」では、門弟の熱が高まっていた。ここには土佐の坂本龍馬や、長州の吉田松陰も訪れた。これら四時軒でのことは当然ながら勝子の夫、七郎の耳にも入ってきた。しかし小楠の門

下生ながらも、在御家人の七郎の立ち位置は複雑だつた。江戸へ京へと上る者たちの背中を見ながら、小谷村でただじつと孤独と戦うしかなかつたのだ。

「お主にこん気持ちが分かるか、あーっ？」

七郎の酒は荒れていき、尋ね来る知人にもくつてかかつた。もともと酒癖がいい方ではなかつたが、胸に絡まつたもどかしい感情から解き放たれたいのか、昼間も酒を浴びるようになつた。夫婦の間には2人目の長女・なも子も生まれていた。いろいろと人目もあることから、勝子はいき過ぎた酒を正すが、酔えば感情を抑えられない七郎は、つい手を上げてしまふのだった。

「また、殴られたとか…」

青あざができる妹の顔に目をやり、兄の源助はため息をつく。醉つた七郎にひどく罵られるたびに、こうして勝子は実家に帰つて来た。

「胸に悶々としたものを持つお方は、他にも多くおられます。ばつてんあん人は、酒に逃げるばかり」

毅然と言ひ放つ勝子に源助は、この妹の気の強さが七郎の気持ちを逆なでするのかかもしれないとも思う。そして、いつもしばらくして林家から迎えがよこされ、勝子は残してきた子らの心配もあり、渋々と戻つてきのだった。

※この物語は、矢嶋楫子の資料をもとに描いたフィクションです

四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959
開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)
入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)
※()は30人以上の団体割引料金

